

機体制御のデータ取得



宇宙往還機の着陸試験で、機体を取り付けたバルーンを揚げる学生ら

大樹で宇宙往還機実験

小型機を空中分離

大 阪 府 立 大
大 阪 准 教 授 大 田 准

【大樹】大阪府立大学堺市工学部航空宇宙工学科の砂田茂准教授や得竹浩助手、学生らによる、宇宙往還機着陸時の機体制御などのデータを取得する実験が1、2の両日、町多目的航空公園北側原野の町有地で行われた。バルーンに取り付けられた小型の実験機を高度約200mで切り離し、プログラム通りに滑空するかなのテストに臨んだ。(北雅貴)

同大が大樹町で実験を行うのは月に純々回数。障害物のない広大な敷地で安全を確保しやすく、気流も安定していることから再度の来町となった。

今回は有人飛行や荷物の運搬などを目的とした宇宙往還機が、地球に着陸する際の機体の制御や、空力特性を調べるための実験。実験機の機体は断熱材などに使われるから実験を開始。バルーンを上空に揚げ、タイマーで切り離された実験機は5分の誤差で着陸した。また、機体の向きや姿勢を指示するプログラムに書き換え、高度50mから上空に放出するテスト

トも繰り返し行われた。得竹助手は「無風の気象条件にも恵まれ、満足できる実験ができた。詳細は大学で分析し、さらに発展した実験を大樹で行えれば」と話していた。